

プレゼンテーション力の向上で

21 世紀型学力を身に付ける学習活動に関する研究

—ICT 活用で伝える力、思考力・判断力・表現力を育む教育活動—

薄井直之（古河市立上大野小学校）・中橋 雄（武蔵大学）

概要：本校では、児童 1 人一台のタブレット端末という環境を生かし、それを自分の考えや意思を伝える道具として使うプレゼンテーションに関する研究を行った。プレゼンテーションの製作過程で児童の思考力・判断力・表現力を身に付ける授業のあり方についても探究した。またプレゼンテーションの評価方法についての研究を行ったことで児童・教師双方が、「よいプレゼンテーションとは」について認識を深める事ができた。研究全体を通して児童の伝える力を向上させることができた。

キーワード：21 世紀型学力、プレゼンテーション、タブレット端末

1 はじめに

21 世紀を生き抜くために必要な学力及び能力は思考力・判断力・表現力と共にコミュニケーション能力と創造性である。こうした要素を包括的に育む学習活動として、ICT を活用して優れたプレゼンテーションを作成させる学習活動を取り上げた。プレゼンテーション力の向上を目指すことで、児童が伝える力や思考力・判断力・表現力を身に付けるための実践的な研究として、本研究課題を設定した。

2 研究の実践

(1) 授業での実践

授業の中に児童が自分の考えを分かりやすく相手に伝える場面を取り入れた「プレゼンテーション型授業」を行った。授業実践を記録し、教科の目標の達成のためにプレゼンテーションが有効な教科・領域の検証を行った。

算数では、自分の考えを論理的に相手に伝える学習を常時行うことができた。

国語では、グループや学級全体で話し合いを行う単元や自分で情報を収集・編集してプレゼンテーションを行う単元があり、プレゼンテーション型授業が有効的な場面の設定ができた。

総合的な学習の時間では、課題に対して児童

が、情報の収集と編集、プレゼンテーションの構成を行う時間を十分に確保するための単元構成を考えることができた。

(2) 毎日のプレゼンテーションの実施

本校では、授業以外にも児童がプレゼンテーションを行う場として「朝のスピーチタイム」を行っている。毎朝、当番制で児童がテーマに応じたプレゼンテーションを行っている。プレゼンテーションの後には質疑応答をしたり、担任から話し手や聞き手の児童の良い点と改善点を指摘したりする時間を設けている。プレゼンテーションの経験を重ねるうちに、聞き手からの質問を予想して、話の構成を練り直したり、回答用のスライドを用意したりする児童もおり、聞き手を意識した発表ができるようになった。また、友達や担任から指摘された改善点を意識して、プレゼンテーションを作成することで常に「相手に伝わりやすくすること」を意識するようになった。

(3) 「プレゼンテーションの評価」の明確化

児童のプレゼンテーション力を高めるために「プレゼンテーション評価シート」を作成した。よいプレゼンテーションとはどのようなものか、それを評価するための観点を低・中・高学年に

分けて整理した表を作成した。作成に当たって、教師だけでなく児童の意見を取り入れることで、児童の相互評価にも使用できるものとなった。

評価シートの内容は教師にとっては児童を指導する際のポイントであり、児童のプレゼンテーションをチェックしたり、評価をしたりする際のポイントでもある。児童にとってはよいプレゼンテーションをするために確認すべきポイントになっており、話の組み立てを考える時、資料を作る時、実際にプレゼンをする時に利用した。

3 成果の検証

(1) 調査対象および調査時期

全学年を対象として、平成 28 年 4 月から平成 30 年 3 月までの 2 年間の調査を行った。

(2) 分析方法

- ① 「伝える・伝わるアンケート」を学期ごとに 1 回実施し、児童の意識の変容を分析する。
- ② 児童のプレゼンテーションを随時動画で記録し、児童の変容を分析する。
- ③ 授業中におけるプレゼンテーションの実践について成果と課題を記録し、授業においてプレゼンテーションが有効な場面（教科・単元・領域）を検討し、プレゼンテーションを行う授業のスタイルを構築する。

(3) 結果

「伝える・伝わるアンケート」の結果を見ると、「発表について」、「資料作成について」、「聞くことについて」の 3 つの項目で、研究を始めた平成 28 年 9 月の結果と比べて、平成 29 年 12 月の結果では向上した項目が多く見られた。

特に相手意識も身に付いてきており、「発表するとき、伝える相手を考えて内容を考えますか。」の結果が 2.9 から 3.4（4 点満点）へと向上した。

授業におけるプレゼンテーションが有効な場面（教科・単元・領域）の検討を通して、教員は単元全体を通した授業デザインができるようになった。

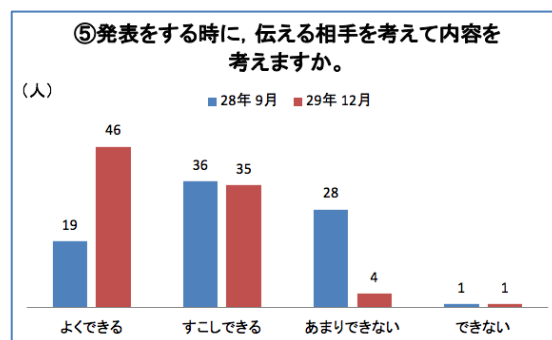


図 1 「伝える・伝わるアンケート」結果より

4 結論

21 世紀を生きるために必要な力は何なのか、この 2 年間時々それを考えながら研究を進めてきた。タブレットや PC、さらには AI ができるころは、それらを使って機械にやらせる。これはこれからの時代に仕事の能率を考えたとき必要不可欠なことである。しかし、人間には何が求められていくのだろうか。課題を把握し、解決のために資料や情報を集め、思考し、結論を求めていくことは必要であろう。だが、この過程はこれまでに人がやってきたこととそう変わらないことである。また、複数の人が集まり話し合っ、よりよい方法を考えていくためのコミュニケーションも欠かせない。これも新しいことではない。ただし、自分の考えをわかりやすく伝える力や相手の意見を理解し応答する力などは、これまで以上に必要となるだろう。特に日本人にはこの点を苦手とする人が多かったように思う。今回の研究でを通して、そのために小学校ですべきことの一部が見えてきたように思う。

5 今後の課題

2 年間の研究で、児童の伝える力を向上させることができたが、一方で聞き手がどれだけ話し手の論旨を聞き取っているか、聞き取る力は付いているのかということについて課題が残った。今後は、話すスキルをより上達させるためにも、人の話を聞き取る力を育成し、話し合い活動により学習を深める研究を進めていく必要がある。深い学びの具現化に向けて研究を推進していきたいと考えている。